

提供卵子を用いた体外受精を選択する不妊カップルの特徴

井上朋子、貫井李沙、寺脇奈緒子、小宮慎之介、浅井淑子、姫野隆雄、森本義晴
HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

晩婚化などの社会情勢の変化に伴い不妊治療を受けるカップルの高齢化が問題になっている。生殖補助医療を受けても子どもを得られない難治性不妊症の主因は卵子の老化である。最終的に第三者からの提供卵子を用いた体外受精を海外で受けることを選ぶカップルの特徴や予後について調査した。

【方法】

2015 年 1 月から 2019 年 8 月までの間に、海外で予定されている卵子提供治療に向けて、子宮内膜測定などのため当院を受診した患者の情報を後方視的に調査した。個人情報取り扱いについては説明の上同意を得ている。

【結果】

海外 (米国) で卵子提供を実施または予定していたカップルは 25 組あり、実際に胚移植を受け、その結果が把握できたカップルは 23 組であった。胚移植時の妻の年齢は平均 46.4 歳 (42 歳-49 歳)、夫は 46.2 歳 (31 歳-59 歳) であった。不妊治療期間は平均 5.9 年間 (2-13 年間)。すべてのカップルで生殖補助医療の治療歴があり、過去の ART 周期は平均 17.2 回 (1-97 回)、すでに子どものいるカップルは 2 組で他は出産歴がなかった。全 27 周期中 25 周期で胚盤胞 2 個移植を受けており、半数以上は PGT-A を実施していた。妊娠に至った周期数は 20 周期、妊娠率は 74%であったが、患者あたりでは妊娠率 87%となった。7 割は双胎妊娠であった。

【結論】

海外で提供卵子を用いた体外受精を選択する不妊カップルは、夫婦とも高齢で長期の不妊治療歴があり 2 個胚移植を希望する傾向があるが、結果的に双胎となりハイリスク妊娠に至ることが多い。この現状を患者の自己責任とするのではなく、医学的にカップルや母児の健康を支援できるような体制が構築されることが望まれる。